

REIS DEMUTH WILTGEN

僕たちが辿ってきた進化のプロセスを伝えられるようなプログラムを考えている

レイス・デムス・ウィルトゲン

PROFILE REIS DEMUTH WILTGEN

ミシェル・レイス(p)を中心に、マーク・デムス(b)、ポール・ウィルトゲン(ds)からなる、ルクセンブルク大公国出身のピアノ・トリオ。胸を打つ表現力、繊細な叙情性、モダンなソングライティングを兼ね備えたヨーロピアン・ピアノ・ジャズで人気を博す。2013年に「REIS DEMUTH WILTGEN」でアリババ・デビュー。最新作は、2021年にリリースした「SLY」。ジョシュア・レッドマン(sax)のお気に入りピアノ・トリオでもあり、毎年春にジョシュアを加えたクアルテット編成でヨーロッパ・ツアーや行なっている。

●WEB=<https://reisdemuthwiltgen.com>



ミシェル・レイス(p)、マーク・デムス(b)、ポール・ウィルトゲン(ds)〈左から〉

1990年代末、ヨーロッパ西部に位置するルクセンブルク出身の10代の若者3人が結成。以来、リリシズムとストーリー性豊かな演奏で世界中の人気を博しているピアノ・トリオ、レイス・デムス・ウィルトゲン。ジョシュア・レッドマン(sax)から大きな賞賛を受けていることでも知られる彼らが、3月31日、4月1日に丸の内・コットンクラブで2-daysライブを開催する。今回のライブは特別ゲストとして馬場智章(ts)を迎えるほか、アルバム・リリース用のライブ・レコーディングも実施される。7年ぶりの来日を間近に控える3人に緊急インタビューを試みた。

メンバーそれぞれが語る 音楽的バックグラウンド

——皆さんは10代の頃から一緒に演奏されているそうですが、どのようなきっかけで音楽に興味を持つようになったのですか？

ミシェル・レイス(以下MR)：僕が音楽を興味を持つようになったのは父親の影響です。父が好きな音楽をどんどん僕に聴かせてくれたり、いろいろなコンサートに連れ

て行ったりしてくれたおかげで、自然にジャズやブルース、ロックに興味が湧きました。そんなわけで子供の頃はロックに夢中。クラシック・ピアノを習っていたのですが、練習はするけど、クラシック音楽 자체はぜんぜん聴こうとせず、聴くのはロックばかり(笑)。もちろん今はそういう音楽も聴いていますけどね。

——ジャズを聞くようになったのはいつ頃から？

MR：11～12歳だったと思います。最初

に好きになったのはデューク・エリントン(p,comp,cond)。ビッグバンドだけでなくトリオ編成のアルバムもよく聴いていました。その他にエロール・ガナー(p)やオスカー・ピーターソン(p)も聴くようになりましたが、一番好きなのはエリントンですね。

マーク・デムス(以下MD)：僕が最初に手にした楽器はクラリネット。最初はクラシック音楽ばかり聴いていましたが、10代前半からロックやポップスを聴くようになり、それでエレクトリック・ベースを始めたんです。最初に好きになったのはステイング(vo,b,g)。ベーシストとしてだけでなく音楽家としてもとても魅力的な存在でした。その後、メタリカやAC/DCのようなハードなものも聴くようになりました。ジャズに興味を持つようになったのは、音楽大学に入ってから。コントラバスと一緒にジャズを学び始めたら、すぐにハマって



しました。

——影響を受けたベーシストは？

MD：最初に好きになったのはスコット・ラファロ。彼がどのように演奏しているのかを知りたくなり、ひたすら研究しました。その後、レッド・ガーランド(p)・トリオやウイントン・ケリー(p)・トリオを聴くようになってからは、自然とポール・チェンバースに興味を持つようになり、さらにチャールズ・ミンガスやチャーリー・ヘイデンらも好きになりました。現代のベーシストではアヴィシャイ・コーベンをよく聴いています。

ポール・ウィルトゲン(以下PW)：僕も最初はクラシック音楽。ドラムを始める以前はずっとチェロを弾いていました。バッハが憧れの音楽家。演奏するのも大好きでした。

——ポールさんがジャズやドラムに興味を持つようになったきっかけは？

PW：クラシック以外の音楽に関しては、親の影響が強いと思います。父がパット・メセニー(g)やレッド・ツェッペリンをよく聴いていたのでね。最初に自分から好きになったのはスティングやクイーン。ジャズへの興味が湧いてきたのは音楽学校に入ってからです。当初はクラシック・パーカッションを演奏していましたが、その後ドラムへと興味が移っていました。当時はビッグバンドの演奏をよくやっていたので、バディ・リッチ(ds)を聴くようになり、それからマイルス・デイヴィス(tp)の

50年代クインテットと60年代クインテット、ビル・エヴァンス(p)・トリオ、キース・ジャレット(p)・トリオへと興味が広がりました。現代のものだとブラッド・メルドー(p)・トリオが好きです。

——影響を受けたドラマーは？

PW：最初に思い浮かぶのはブライアン・ブレイド。ドラミングだけでなく彼の持つ音楽性にも大きく惹かれています。それとホルヘ・ロッシーにも影響を受けていると思います。メルドー・トリオは本当によく聴いていたので。

出会った当時に感じた閃きのようなものをお互いに今も持ち続けている

——そうしたさまざまな音楽的バックグラウンドを持つ皆さんのが集まつたレイス・デムス・ウィルトゲンですが、どのように出会っていったのですか？

MR：最初に出会ったのは僕とポールです。初めて一緒に演奏したのは1998年。僕が16歳で、1学年上のポールが17歳の時だったと思います。

PW：そうですね。高校で出会いましたが、ミシェルには本当に驚きました。なにしろ僕の身の周りにはミシェルみたいな演奏をするピアニストはいなかったから。

——それはどのような点で？

PW：ルクセンブルクで音楽を学んでいると、演奏がアカデミックな感じになってしまいがちです。クラシックの講義や実習をたくさん受けるから、どうしても感じが似

てきます。だけど、ミシェルのピアノはまったく異質。ものすごく大きなパッションがある感じでした。考えて演奏するのではなく、耳から聴こえてきた音、自分の内側から湧きあがってくる音を弾くというアプローチ。当時のルクセンブルクにはそういうピアニストはほとんどいませんでした。あれから20年以上が経っているけれど、ミシェルは今でもそのアプローチを貫いています。だから一緒に演奏していくものすごくインスピアイアされます。

——デムスさんとはいつ頃から？

PW：僕とミシェルが友人のギタリストと一緒にギグをしている時にマークが聴きに来てくれたの最初かな。そのギタリストがマークと僕にとっての共通の友人だったので、マークを誘ってくれました。それをきっかけにマークと演奏するようになりましたが、本当に楽しかったし、目の前がどんどん開けてくる感じでした。というのも、マークは僕の2学年上。その当時すでにブリュッセル音楽院に進んでいたし、プロとして演奏活動も開始していました。そんな彼と一緒に演奏することでジャズを学んでいたように思います。

MR：そうそう。僕もそんな感じだった！

実は、僕はそのギグよりも前にマークのコンサートを聴きに行ったことがあって。ものすごく感銘を受けていたから、最初に一緒に演奏した時はとても緊張したのを覚えています。

MD：これはこれは！ ふたりとも光栄な

言葉をありがとう(笑)。その日のことは僕も覚えている。なにしろ、“若いけれどクラシック音楽もジャズもすごい演奏をするピアニストがいる”という噂が立っていて、気になっていましたから。ギグも評判通り、とても素晴らしかった。特に印象的だったのはミシェルとポールの音楽的な結びつきです。演奏にものすごく強いケミストリーを感じることができました。今でもあのギグは強烈に印象に残っています。

——それ以来、メンバー・チェンジをすることなくトリオ活動を続けられているわけですが、それを可能にしているものは何でしょうか?

PW：一番大きなものは、その当時に感じた閃きのようなものをお互いに持ち続けていることじゃないでしょうか。それから、3人がチームとして上手く連携していることも挙げられると思います。特にリーダーを設けることなく、互いのスキルを尊重しながらすべてを進めていく。それは音楽面はもちろんのことだけですが、バンド運営の面でも同様に行なっています。

トモは作曲・演奏の両面で 僕たちの大好きなアーティスト

——その皆さんのが3月31日～4月1日にコットンクラブで2-daysライヴを開催されます。

MD：そうなんです。僕たちもものすごく楽しみにしているんです。なにしろ7年ぶりの来日ですからね。それまでは毎年のように日本を訪れていたのに、COVID-19のためにぽっかりとブランクが空いてしまいました。新たなスタートに相応しいライヴにしようと思っています。

——どのようなコンサートになるのでしょうか?

MD：僕たちが辿ってきた進化のプロセスを伝えられるようなプログラムを考えています。2018年のコンサート以来、日本に来られなくなってしまったが、その間も僕たちはずっと進化を続けてきました。それを感じ取っていただけるようなコンサートにするつもりです。ですから、以前の曲を新アレンジで演奏することも考えていますし、新しい曲も数曲お披露目する予定。さらに、皆さんに楽しんでいただけるような大きなプロジェクトもふたつ盛り込むことになっています。

——どのようなものかお話しいただけますか?

PW：ひとつはライヴ・レコーディングを実施するということ。僕たちのアルバムは、2021年に発表した『Sly』が最後です。次の作品の構想を練っていた時に思い付いたのがライヴ・レコーディングでした。それを考えた時に、最良の場所が日本だと思えたんです。これまで5回来ている日本は僕たちにとって第2の故郷。中でも4回のライヴを開催してきたコットンクラブはとても音響の良いヴェニューですから。

MR：今ポールが音響のことを話しましたが、僕にとってはピアノが素晴らしいということも大きな要因です。音色もコンディションも最高に保たれていますから、サウンド・チェックもたいていは5分くらいで完成。それは本当にありがたいことです。それからオーディエンスの皆さんのが熱心に聴いてくださるのも嬉しいですね。きっと最高のライヴ・レコーディングになると思います。ファンの皆さんに、オーディエン

スのひとりとして僕たちのレコーディングに参加していただけると嬉しいです。

——先ほどおっしゃっていたもうひとつの大きなプロジェクトとは?

MD：トモ(馬場智章/ts)に数曲でゲスト参加してもらいます。僕たちはこれまでに何度かジョシュア・レッドマン(sax)と共に演しています。その時に、僕たちのサウンドとサックスとの相性がとても良いことに気付いたんです。トモは作曲・演奏の両面で僕たちの大好きなアーティストです。一緒にステージに立つののは今回が初めてですが、新たな出会いにワクワクしています。

——それでは最後に、今後の御予定やプランをお聞かせください。

MD：コットンクラブでのライヴ・アルバムを発表する前、今年の11月～12月頃に新作をリリースします。僕たちトリオの他に、ヴィンス・メンドーザ(comp, arr, cond)が指揮をするオーケストラが参加します。それから先ほど話に出たジョシュアも3曲でフィーチャーされています。

——それはビッグニュースです。レッドマンとのお付き合いは長いのですか?

PW：ジョシュアと初めて会ったのは2014年。南フランスのフェスティヴァルのダブルビルで一緒にになりました。その時に彼が僕たちの曲を気に入ってくれ、それをレッドマン・カルテットで演奏するようになりました。その後、僕たちのコンサートにも参加してもらうようになってきました。今年冬に、彼とオーケストラを迎えたアルバムを出す予定ですが、その編成でのコンサートは2018年と2022年に行なっています。今後も続けていこうと思っています。



レイス・デムス・ ウィルトゲン

with special guest 馬場智章

●3月31日(月)、4月1日(火)

=丸の内・コットンクラブ

出演：ミシェル・レイス(p)、マーク・デムス(b)、ポール・ウィルトゲン(ds)、スペシャル・ゲスト=馬場智章



馬場智章(ts)